

青年学級への参加度に関連する諸要因

——石川県における実態調査から——

田 中 矢 小

中 追 嶋

富士夫
清典
秀夫

(共同執筆)

青年学級への参加度に関連する諸要因

——石川県における実態調査から——

小 矢 田
嶋 追 中
秀 清 富
夫 典 夫

もくじ

一	調査の目的	1
二	調査の実施方法	1
2	分析の方針	2
三	調査対象者のプロフィール	1
1	変数のとりあげ方	2
2	余暇利用と学習に対する態度	3
3	参加度に結びつく要因	4
4	地域比較	5
四	結果	2
付録	調査用紙	1

一 調査の目的

この調査は、勤労青少年の学習機会の拡充やサークル活動促進な

どの施策に必要な基礎資料を得るために企画されたものである。
この目的のためには、すでに総理府や中央青少年団体連絡協議
会、その他の機関によって実施されている実態調査や世論調査のよ

うに、ひろく一般青少年の生活実態やその動向を把握することがたいせつであることはいうまでもない。しかし他方、より焦点をしぼった、社会教育の意図的・計画的な実践とからみあわせた調査も、また重要な役割を果たすものと考える。この調査は、後者の立場から、調査の対象を、石川県下の青年学級および開発青年セミナーに在籍する学級生において実施した。

青年学級および開発青年セミナーへの出席状況をみても、単に在籍しているというだけで、ほとんど学習活動に参加していないような学級生から、皆出席というのまで散らばっている。それぞれ余暇の実状や、学習に対する意識、学級・セミナーの在り方についての希望・意見などにさまざまながいをみるわけである。ここでは、こうした学級生のすがたから、学級への参加度や意見に影響を及ぼしている諸要因についての説明を試みてみたい。

この研究は、学級生とそうでない青年との比較を試みたものではない。地域により実情に差はあるとしても、公に設置されている社会教育の学級に参加するものは、対象となりうる青年人口のごく一部にしかすぎない。学級に参加してこない青年には多様性があると考えられるが、かれらはどのような特徴をもっているのか、そして、かれらに行政の立場から働きかけは必要なのかという問いに答えるには、別の企画による研究が必要である。

二 方 法

二・一 調査の実施方法

この調査は、石川県内の青年学級および開発青年セミナーに在籍している学級生を対象に、質問調査票を用いて、集団的に実施した。

対象、調査票の構成、実施時期の詳細については以下に述べると

おりである。

調査の対象

県内で表2-1に示されている九地域を選び、各地域の青年学級あるいは開発青年セミナーに在籍する学級生、七五〇名を抽出して調査対象とした。実施の結果、七二五名の調査票が回収された。

調査票の構成

この調査票は、自計式であり、学級やセミナーの学習日に集合調査として実施できるように設計されている。

表2-1 地域別対象者数

対象地域	一次分析対象数	二次分析対象数
	回数	回数
市村市市町町市	97	55
賀谷	21	14
野口沢	8	4
加吉尾	224	126
金羽	139	53
鹿島	50	41
穴珠	50	35
	60	26
計	699	390

語法の改訂や削除を行ない最終的に三二問で、印刷体裁等を決めた。

調査票の内容は、性別、年令、職業、学歴等いわゆるフェース・シートの個人属性をきく質問群と、就労条件、職場の対人環境、所属団体、広義の社会教育活動への参加状況、余暇とその利用、学習に対する態度、学級参加の動機と出席状況、学級やプログラム内容に対する意見、などをきく質問群とから構成されている(末尾の調査票参照)。

調査の実施

この調査は、各地域において、その地域の社会教育担当者の協力のもとに、昭和四十七年一月中旬から下旬にかけて実施された。

原則として、学級あるいはセミナーの学習日に集合的に行なわれ

たが、一部欠席者などについては、自宅で記入されたものも含まれている。

回収状況は前に述べたとおりであるが、この種の調査としては、かなりよく回収されたほうであろう。各地域の社会教育担当者の力に負うところが大きい。

二・二 分析の方針

分析対象の選択
回収された七二五名分の調査票のうち、不完全票（代人が記入したもの、および、誤配布により学級生以外が記入したもの）二六を除いた六九九名の資料を、一次分析の対象とした。ここでは、全体で一八四の項目について、男女別・地区別、および、全体での単純集計が行なわれたが、その結果については今回は報告しない。

ついで二次分析として、諸項目間の関連分析を行なった。これに際してまず、各種の分析に耐える資料を選ぶために、分析の対象となる全項目を通して無回答を含まないケースを計算機によりぬき出した。これは厳しい基準で、三九〇名分の資料が残ることになった（表2-1参照）。一次分析の結果を見ると、調査票の終りの方に置かれていた問30と32に対して、八一九名の無回答があったことが分る。この調査の集団での施行の際、一部の学級で記入のための時間がやや不足し、記入の遅れた学級生が無回答のまま、調査票が回収されるようなことがあったのかも知れない。一次分析での男女比は、およそ五九対四一であったが、二次分析でのそれはおよそ六二対三八となり、女子の比率がやや下った。この主な原因は問27以降で女子の無回答率が男子のそれを上まわったことにある。

磁気テープに記録された三九〇名のデータは、必要に応じて反応カテゴリーの再構成をしたり、項目分析や主成分分析に基いた尺度化や得点化の手続きを経て、最終的なクロス集計や重回帰分析にか

けられた。尺度化・得点化の手続きと結果の概略は三・二で述べられるので、ここでは、分析の枠組みを述べることにする。

分析の枠組み

今回われわれが入手できた資料は、質問票に対する学級生の回答だけであって、それ以外の情報が各個人について得られなかった。学級生の回答から得られる情報の内容を大きく二分すると、(一)学級生一人一人がどの程度学級に出席し、学級の在り方に対してどのような意見をもち、そして、今後も学級に参加しようと思っているかどうかという、いわば学級に対する参加度と、(二)参加度に関係すると思われる要因となる。われわれは、個々の学級生の回答をこの枠組みで整理して行った。

結果のうちの三・三では、参加度に関係すると思われる要因間のクロス集計の結果の中から、主なものをぬき出して記述する。

三・四では、(一)の参加度に対して、(二)の要因のどれがどのように結びついているかを分析する。このような場合に従来よくとられてきた分析法は、(二)の要因を一つずつとり上げて、どれが参加度と結びつかを順に調べて行くというやり方であった。しかし、(二)の要因は、個々バラバラに参加度に結びついているのではなく、相互にからみ合いながら、学級への参加度に結びついているはずである。したがってここでは、そのような様相を明らかにしようとする分析法の一つである重回帰分析を行なうことにした。

ところで、上述の分析はすべて、個人の水準で参加度とその要因を調べ、諸連関を全体の集団内で統計的に知ろうとして行なわれたものである。それに対して、三・五では、地区を分析対象にとり上げる。調査対象となった九地区のうち、人数の少ないところを除いた六地区について、かんたんな記述と比較を試みる。当初の計画では、その年度に各学級・セミナーで行なわれた学習プログラムを分

析して、それとの関連で地区別の結果を解釈することになっていった。しかし、今回の調査対象になった個々の学級・セミナーで実際に行なわれた学習内容についての十分な資料が得られなかったの
で、その分析には進めなかった。

今回の分析の一つの中心的目的は、三・四で扱うような、学級への参加度と結びつく要因を探ることであるが、ここで留意しておくべき事を二、三述べておく。まず、ここでは三九〇名をコミにした分析がなされた。したがって、全体を通して関連のある要因が浮び上ってくることになる。しかしながら、参加度に結びつく要因は、地区により異なる面もあるだろう。そのような地区別の分析は、標本の大きさの関係で行なえなかった。今回の分析は異質な集団をコミにするという危険を冒したものである。つぎに、われわれは、そのとき、それぞれの学級やセミナーでなされていた学習等を所与のものとして扱ったという点を忘れてはならない。もし、学級やそこの学習の在り方が変れば、参加度と結びつく要因も変る可能性がある。その点で、今回の結果の一般化の限界を心得ておく必要がある。最後に、今回の分析の資料はすべて、学級生の質問紙に対する回答に限られていることである。参加度も、それと結びつく要因も、ともに学級生という共通のフィルターを通して捉えられたものであるから、データの混淆が起り得るのである。

三 結 果

三・一 調査対象者のプロフィール

本調査の対象者は、前記のように石川県下の九地域の青年学級生であり、そのうち調査票の記入が完全であった三九〇名の回答が分析の対象となった。ここでは、これらの学級生の日常生活の概況や個人特性を、もっぱら単純集計の結果(付表1参照)を中心に記述

することによって対象者のプロフィールを描いてみることにする。

まず、対象者の性別・年令別構成をみると表3-1に示されるようにに全体

表3-1 対象者の性別・年令別構成

性\年令(才)	～19	20～21	22～	計
男	40	60	143	243
女	48	82	17	147
計	88	142	160	390

表3-2 暮らし方と地域との関係

暮らし方\地域	家族と同居	同居せず	計
金沢市	77	49	126
以外の地域	252	12	264
計	329	61	390

二二才以上の女子は二一％に過ぎない。学歴構成では、高校卒が最も多く(七四％)、中学卒は二二％である。暮らしの形態を家族との同居という観点からみると、表3-2のように金沢市の学級生は他地域(五％)にくらべて同居していない者の比率が高い(三九％)ことがわかる。職業形態を勤め人か否かで分類してみると、全体では七七％が勤め人であり、家業、家族従事者、無職は比較的小ない。勤め人の比率には若干の地域差がみられ、珠洲市、鳥屋町、鹿西町では低く(五八％)、羽咋市、加賀市、金沢市では高く(八五％)なっている。しかし、前者の地域に農林漁業従事者が多いとはいえない。

に反し、

次に、学級生の余暇時間の状況に関してみれば、余暇が全くないとか少ないと答えたのは三二%であり、多い方だと答えたのは一三%である。こうした現状に対して、もっと余暇が欲しいと答えたのは四五%であつて、現状でよいとか、もっと少なくてよいという人が五四%である。自分の余暇の過し方が良いか悪いか自己評価した結果は、良い方だと思う人が一四%で、悪いと判断した人は四〇%である。余暇と関係の深い経済生活の一端をみるために、毎月自由に使える小遣の額をみると、一万五千円以上支出する者は四一%（一万円以下は二九%）であり、この比率は金沢市では若干大きく（五一%）なつてゐる。

諸団体への加入状況をみるために、現在積極的に参加、活動している団体（青年団、労組、同業者団体等）の有無を聞いた結果は、全体の八三%が何らかの団体活動をしていることが知られた。また、趣味やスポーツ関係のサークル、同好会に所属し積極的に活動している人は六七%であつた。

ところで、自分の悩みや困つたことなどを打ち明け相談する相手は誰であるかと訊ねた結果は、親しい友人を挙げた人が最も多く（六五%）、次いで家族（一六%）、職場の上役・先輩（八%）の順であつた。

さて、彼等が青年学級に何を求めているかを知る意味で、学級に参加した最大の理由を訊ねたところ、最も多い回答は、「いろいろな人びとと知りあいになるため」（四七%）であつて、次いで実利的な理由（例えば、職業に役立てるとか、社会常識を身につける等々）が四三%であつた。

三・二 変数のとり上げ方

二・二で述べたように、質問票に対する学級生の回答から得られる情報の内容を大きく二分すると、学級に対する参加度と、参加度

に関係すると思われる要因となる。ここでは、得られた情報をどのように整理したか、そしてその結果として、どのような変数を取り上げたかを述べることにする。

参加度に関する四変数

質問票の間30に、学級（セミナー）の在り方についての意見を採るための一八項目が用意してあつた。また、間28と間32では、学級（セミナー）への出席状況や今後の出席予定を四〜五段階の反応選択肢を用いてたずねている。これらの項目に対する学級生の反応に基づき、われわれは学級参加度に関する四変数を取り上げた。それそれについて、かんたんに説明する。

問30の一八項目に対して学級生がなした反応は、各項目バラバラのものでなく、相互に関連したもの捉えることができる。三九〇名の一八項目に対する反応の相互関連を表わす相互相関行列を主成分分析すると、二つの主要な成分が見出された。この成分の心理学的な意味の解釈を容易にするために、ヴァリマックス回転を行なつた。表3-3は、見出された二つの成分に主として負荷する項目群を示したもので、負荷量の数値は、各項目と成分との相関を表わしている。われわれは、見出された成分が、どのような項目と高い相関を示しているかという情報から、その成分の解釈を試みるのである。なお、表の分散比は、全分散のうちで、その成分の分散が占める比率を示している。この比率が高くないのは、項目間の相関をファイ係数で求めたためである。

この分析に基いて、個々の学級生が一八項目に対して行なつた回答を、二つの得点にはば凝縮することができ、それによつて、個々の学級生が学級の在り方についてもっている意見を、効率よく表わせるようになる。この得点（ふつう、因子得点と呼ばれている）を求める手続きをかんたんに述べると、標準得点に変換された個人の

表 3—3 参加度（学級に対する意見）の 2 成分を代表する項目群

I 承り学習に対する否定的意見（分散比：13.5%）	
項 目	負荷量
・講師の話に、つまらぬものが多い	.73
・一般教養にかたよりすぎる	.64
・プログラムの組み方に主事の好みが入りすぎる	.61
・講師の話は、むずかしすぎる	.45
・実生活に役立つ内容が少ない	.45
・出席していると費用がかさみすぎる	.43
II 学級運営に参加を求める建設的意見（分散比：10.2%）	
・なるべく、お互いの討論や話し合いの時間をふやすようにしたらよい	.73
・一つ的话题を深く掘り下げて行くようなプログラムがほしい	.69
・学級生が自分たちの手でプログラムを考えるようにしたらよい	.62
・もっと有名な人の話をききたい	.37

るが、表には、それぞれの因子得点の算出に大きい重みを占める項目だけが示されている。なお、粗点の歪みのため、五段階得点が、実際には四段階になることがあった。

一八の項目得点のベクトルに、ヴァリマックス回転された主成分行列に適当な変換を施したものをかけるのである。これにより、三九〇名の集団において、その平均値が三、標準偏差が一、そして二つの得点間の相関が〇（これらはすべて、丸めによる誤差の範囲内）であるような五段階得点が得られる。この説明でもわかるように、それぞれの因子得点の計算には、一八項目全体が使用されているが、表には、それぞれの因子得点の算出に大きい重みを占める項目だけが示されている。なお、粗点の歪みのため、五段階得点が、実際には四段階になることがあった。

I 承り学習に対する否定的意見
この得点を決めるのに強く関係している項目は、表 3—3 のとおりである。この得点の高い学級生は、一般教養を中心とした講義という内容・形式に魅力を感じず、学級の在り方に不満をもっているといえる。実際に必要な費用は多くなくても、不満があると高く感じるであろう。

II 学級運営に参加を求める建設的意見

表 3—3 から分るように、この得点の高い学級生は、自分たちによるプログラムの主体的決定や、学習方法や内容の改善を求めているのであって、I のような受身的な不満ではなく、積極的・建設的な態度をもっているといえる。「もっと有名な人の話を聞きたい」というのも、単に有名人にაცოგაれているという浅薄な意見の表明ではなく、より充実した学習内容を求めていることの表われと解釈できよう。

III 学級への出席状況

これは、学級（セミナー）への出席状況をたずねた問 28 への回答を、(一)ほとんど休まない、(二)ときどき休むくらい、(三)出・欠半々くらい、(四)それ以下の四つのカテゴリーにまとめ直したものである。このような情報は本来、客観的な出席記録による方が望ましいのはいうまでもないが、今回はそのような情報が得られず、やむを得ず学級生の主観的報告で代用した。

IV 学級への出席予定

今後、学級（セミナー）に出席しようと思うかをたずねた問 32 への回答を、(一)できれば全部、(二)プログラムにより、(三)それ以下の三つのカテゴリーにまとめたもので、これは学級生が学級活動の公式的・非公式的側面に対して感じている魅力を、かなりよく反映していると考えられる。

表3—4 学級に対する参加度を測る4変数間の相互相関
(ピアソンの r)

	尺 度 名	I	II	III	IV
I	承り学習に対する否定的意見	—			
II	学級運営に参加を求める建設的意見	.00	—		
III	学級への出席状況	-.16	.16	—	
IV	学級への出席予定	-.29	.03	.32	—

これら四変数間の関係を表3—4に示されている。最初の二変数間の相関は〇になるようにしてあるの
で、それ以外の相関を検討してみよう。IとIVはマイナス〇・二九の逆相関を示しており、現在の学級の在り方に不満をもっているものは、今後、学級へあまり来ようとはして
ないという、当然の結果になっている。

一方、学級の在り方について積極的・建設的な意見をもっていることと、出席状況・出席予定との間には、目立った連関はない。出席状況は、本人の学級に対する構えの他に、本人をとりまく諸条件に規定されるものであるから、IIとIIIとがあまり連関をもたないのは分る。むしろ注目すべきは、IIとIVとがほとんど
と関係をもたぬことである。

つまり、IIの得点が高い学級生は、より充実した、しかも自分たちが主体的に参与できる学級活動を要求しているのであって、現在の学級に魅力を感じている（IIの得点が高くなる）とは限らないのである。なお、IIIとIVとの相関は当然であろう。

以上のように四変数間の相関は高くなく、これらは広い意味での学級への参加度を互いに異なった側面から捉えようとしているのだといえる。このことから、個々の学級生を四得点の組み合わせによつ

てつくり出された類型に分けることもできるが、今回はそこまでは進まず、四変数を個別的にとり上げて分析することにした。

参加度に関係すると思われる二六変数

二六変数のうち一六は、質問票の項目に対する回答をそのまま、あるいは必要に応じてより少ないカテゴリにまとめ直したものである。その場合、カテゴリの分割点は全体の分布をみて決定した。つぎに、平日の余暇の過ごし方の二六項目と学習に対する態度の三五項目については、参加度に関する変数の項で述べたような方法によって、三つおよび五つの因子得点に圧縮した。最後に、性格に関する一二項目は、項目分析の手続きを経て、二つの尺度得点で表わした。これらについて、かんたんに示す。

- ①性別 (一)男、(二)女
- ②年令 (一)一九才以下、(二)二〇～二一才、(三)二二才以上
- ③学歴 (一)中卒、(二)高校在学中・高卒、(三)それ以上
- ④暮しの形態 (一)家族と同居、(二)それ以外
- ⑤職業 (一)勤め人、(二)それ以外
- ⑥相談相手 (一)相談しない、(二)家族、(三)友人、(四)上役・先輩、(五)その他
- ⑦同年輩のものとのつきあい (一)多い、(二)それ以外
- ⑧新聞を読む時間 (一)一〇分くらいまで、(二)それ以上
- ⑨積極的に参加している団体 (一)ない、(二)ある
- ⑩積極的に参加しているグループ・サークル (一)ない、(二)ある
- ⑪小遣 (一)一万円未満、(二)一万円～一万五千円未満、(三)一万五千円以上
- ⑫余暇 (一)まったくない・少ない、(二)平均なみ、(三)多い
- ⑬余暇時間についての希望 (一)もっとほしい、(二)現状でよい、(三)もっと少なくてよい
- ⑭余暇の過ごし方の自己評価 (一)非常に悪い・少し悪い、(二)ふつう、

表3—5 平日の余暇の過ごし方の3成分を代表する項目群

⑮ 娯楽・交際中心の過ごし方 (分散比: 13.0%)	
項 目	負荷量
・ボーリング、ゴルフなどをする	.64
・喫茶店、飲食店へ行く	.62
・ボーイ(ガール)フレンド、恋人と会う	.59
・ハイキング、ドライブなどをする	.58
・映画、演劇、音楽会などに行く	.52
・友だちと会って話し合う	.41
⑯ 無為・消極的な過ごし方 (分散比: 9.9%)	
・ぼんやり、なんとなく	.75
・ごろねなど休憩をする	.72
・子ども相手に遊ぶ	.52
・テレビ、ラジオ、ステレオなどを楽しむ	.36
⑰ 勉強・趣味などの積極的な過ごし方 (分散比: 9.6%)	
・勉強をする	.63
・本を読んだり、文を書いたりする	.61
・生花、絵画、写真、製作などをする	.52
・家族と話し合う	.44

(三) 少しよい・非常によい

問23の余暇の過ごし方についての二六項目のうち、反応が著しく片寄ったり、性差が大きい項目を除いた一八項目への反応(平日の分)間の相互相関(ファイ係数)を求めると、例えば、ボーリングなどをするものは喫茶店へ行き、恋人と会うことが多いというパターンが認められる。主成分分析の結果、このようなパターンとして以下にあげる三つの成分が見出された。それぞれを代表する項目

は、表3—5に示されている。

⑮ 娯楽・交際中心の余暇の過ごし方

⑯ 無為・消極的な余暇の過ごし方

⑰ 勉強・趣味などの積極的な余暇の過ごし方

問24の、広い意味での学習に対する態度を探るための三五項目への反応の分析から見出された五変数のそれぞれを代表する項目は、表3—6に示されている。以下に各変数についてかんたんに説明する。

⑱ 学習に対する肯定的態度

これは学習に対する積極的態度を表わしているように見えるが、この得点の高いものすべてが本当の勉強好きで積極的に学習に取り組もうとしているとは思えない。勉強についての肯定しやすい項目に深く考えずに同調した場合もあることは、内容的に矛盾した項目に同時に反応していることから推測できる。

⑲ 読書・勉強好き

この得点の高い学級生は、⑱の場合と異なり、読書や勉強が本質的に好きで、ひとりでも自発的に学習し続けて行くような態度を示しているといえる。

⑳ 学習アレルギー

この得点は、学習アレルギーといってもよいほど、改った形態での学習に対する拒否的態度を反映しているのであろう。

㉑ 学習に対する実利主義的態度

この得点は、実利主義の立場からの、従来の学校教育に類似した内容の学習に対する否定的態度を反映していると思われる。この得点の高い学級生は、すべての学習を否定しているのでなく、実利と結びつくものならやろうという構えがうかがえる。

㉒ 上級学校へのあこがれ

この得点は、希望しなげらかなえられなかった上級校進学を夢を
表わしているようである。この得点の高い学級生は、やはり学校で
ないと学べないことがあると考え、そこで勉強したかったと強く考
えているのであろう。

ぞれ数項目で測ろうとしたものである。向性および神経症的傾向の二尺度とも、六項目が用意されたが、項目分析により、一項目が向性を測るのに不適切だと分つたので、向性は五項目で測つた。わずかに五ないし六項目からなる短縮された尺度であるが、(ハ)内に示してあるキューダー・リチャードソンの公式二〇による信頼性係数で

も分るように、一応、使用に耐えるものといえる。しかし、向性の尺度は、今後つくりかえる必要があろう。

②向性(外向性—内向性)〔〇・五七〕

この尺度得点は、問25の2、4、7、8、10の項目に対する「はい」反応の数で決められ、この尺度得点の高い人は、社会的・活動的であって、考えるよりも実行型といえよう。

④神経症的傾向〔〇・七三〕

これは問25の1、3、5、6、9、11の項目に対する「はい」の反応数で決められ、この尺度得点の高い人は、気分が動揺しやすく情緒の安定性に欠けるといえる。なお、外向性と神経症的傾向の二尺度の相関はマイナス〇・二二であり、アイゼンクの成人での結果(マイナス〇・〇五)より、やや絶対値が高くなっている。

最後に学級やセミナーに関する二変数がとり上げられた。

⑤学級への参加理由 (一)実利的、(二)仲間を求めて、(三)なんとなく・その他

⑥学級への出席を阻害する条件 (一)ない、(二)ある

三・三 余暇利用と学習に対する態度

ここでは、すべての調査項目間のクロス集計結果からとくに余暇とその過ごし方、および、学習に対する態度の項目を中心として、二、三の推測される傾向について述べる。

まず、余暇の有無と、余暇時間についての希望との関係については、表3—7のとおりである。表は実数で表わしているが、クラマ—のファイ係数も〇・五一と、かなりな相関を示している。これは「少い——もっとほしい」「平均なみ——現状でよい」「多い——少なくてよい」といった、当然の反応のあらわれであろうが、また反面、「多い——もっとほしい」や「少ない——現状もしくは少なくてよい」としている反応も少なくないので、無視することはできない。

表3—7 余暇の有無と希望の関係 (N=385)

希 望	有 無		少ない・平均なみ・多い	
	有	無		
もっとほしい			95	67 13
現状、少なくてよい			27	147 36

* 総計が385になっているのは、当該項目に回答した5名を除いたためである。

付表1と2に示してあるが、自己評価では「悪い」としているもの一五七(約四〇%)に対して「よい」としているもの五五(約一四%)になっている。「悪い」と思っているものすべてが「充実させたい」という欲求を示していることにはならないであろうが、現在の余暇の過ごし方に内省的な眼をむけているものもかなりいると考えてよいだろう。

そこで、自己評価の「よい」「悪い」の二回答群を抽出して、両群の実際の余暇の過ごし方を対比させてみた。図3—1は「娯楽・交際」「勉強・趣味」「無為・消極」の三因子について、それぞれの因子得点の分布比率を「よい」「悪い」の二回答群にわけてあらわしたものであり、右端の数値は各群の因子得点の平均値である。例えば、自分の余暇の過ごし方を「よい」としている人々のうち、約一

い。とくにこのような反応は女子の方々に多かったが、いずれにしても、面接等による、いっそう詳しいデータを得なければ、その理由などについて言及できないので結果の提示にとどめておく。

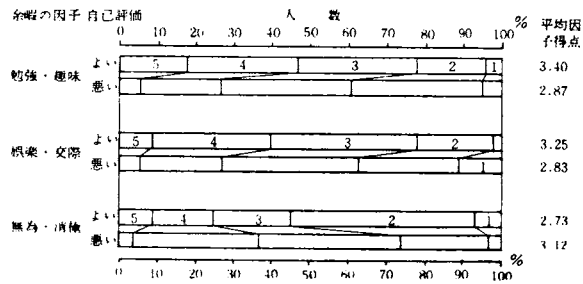
次に、余暇の過ごし方と、それに対する自己評価との関係についてふれた。自己評価は「悪い」「ふつう」「よい」の三段階にわけている。余暇の過ごし方は前節三・二で述べたように「娯楽・交際」「無為・消極」および「勉強・趣味」の三因子を考え、因子得点を算出している。何れも、その分布を

表3-8 学習に対する態度と各調査項目に対する回答との関係

(平均因子得点)

調査事項	尺 度	肯定的態度				
		肯定的態度	読書、勉強好き	学習アレルギー	実利主義的態度	上級校へのあこがれ
①性別	男	2.95	2.84	2.92	2.97	3.12
	女	3.82	3.29	3.09	3.10	2.90
②年 令	～19	2.78	2.91	3.17	3.37	3.06
	20～21	3.13	3.11	2.99	3.04	3.01
	22～	3.11	2.94	2.88	2.79	3.02
③学 歴	中卒	2.85	2.76	3.11	3.24	3.23
	高在、卒	3.10	3.02	2.99	2.97	2.97
	大(短大)在、卒	3.10	3.75	2.65	2.75	2.95
⑦同年輩とのつき合い	多い	3.03	3.00	2.82	2.98	2.96
	ない、少ない	3.06	3.01	3.19	3.06	3.10
⑧新聞を読む時間	～10分位まで	3.06	2.88	3.07	3.14	2.99
	それ以上よむ	3.02	3.17	2.87	2.85	3.07
⑨団体活動への参加	している	3.02	3.01	2.93	3.00	3.04
	していない	3.18	2.97	3.27	3.09	2.94
⑭余暇の過ごし方の自己評価	よい方と思う	3.15	3.04	2.76	3.09	3.09
	ふつう	2.98	3.10	3.06	3.12	3.11
	悪い方と思う	3.08	2.89	2.97	2.87	2.90
⑮学級・セミナーへの出席阻害条件	ない	3.01	3.12	2.91	3.01	2.95
	ある	3.09	2.89	3.08	3.04	3.11

図3-1 余暇の過ごし方と自己評価



は、何かしたい、何かしなければと思いついて、結局無為な時間を過している姿を思い出させる。一般の意識の中に「無為・消極」が「悪い」と結びついていることを物語っているものかもしれない。もちろん、余暇の過ごし方の三因子の総合的なプロフィールや、自己評価に対する態度の問題なども明らかにできないから速断はできない。しかし、青少年教育の施策あるいは指導の中で、「無為・消極」因子の多い余暇を過している青少年に対して、何らかの手だてが必要であることを示唆していただろうか。

八分は、「勉強・趣味」で余暇を過す傾向が最も強い（段階点五の）人によって占められるのに対して、余暇の過ごし方を「悪い」と考えている人々の中には、約六割しかそのような人が含まれていないことがわかる。

この図をみる限りでは、「娯楽・交際」「勉強・趣味」の二因子については、どちらも「よい」群の方が、因子得点の高いものの比率が多くなっている。それに比べて「無為・消極」因子では「悪い」群に因子得点の高いものの比率が多いうことであり各群の因子得点の平均値にも、その傾向があらわれており、これ

学習に対する態度については、前節三・二に述べた「肯定的態度」「読書・勉強好き」「学習アレルギー」「実利的態度」「上級校へのあこがれ」の五つの因子得点（付表2参照）と、他の調査項目に対する反応との関係を確かめようとした。ここではその中から、性別、年令、学歴、同年輩とのつき合い、新聞を読む時間、団体活動への参加、余暇の過ごし方に対する自己評価、学級への出席障害条件の八項目に対する反応との関係にふれておく。

表3-18は、各調査項目の回答群ごとに、学習に対する態度の五因子得点の平均を示したものである。各回答群の平均間の差に関して検定などの吟味も行なっていないが、一応この表によって、各項目ごとに五つの因子得点の高いほうの回答群を拾いあげてみた結果は次のとおりである。

調査項目	肯定的・勉強好き・学習アレルギー	実利的・あこがれ	上級校
性別	女	女	女
年令段階	低い	低い	低い
学歴	高い	低い	低い
つき合い	よく読む	少ない	少ない
新聞を読む	よく読む	少ない	少ない
団体活動参加	不参加	不参加	不参加
余暇利用の	よい方	悪い方	よい方
評価	よい方	悪い方	よい方
出席障害条件	ない	ある	ある

空欄は、何の傾向も見出せないことを示し、印は、かなりはつき

り傾向が認められることをあらわしている。これをみると、多少理由の推測できないところもあるようだが「勉強好き」と「学習アレルギー」とは対照的とみてよいであろう。

また、学習に対する態度と余暇の過ごし方との関係については、各因子得点との相関を求めてみたが、表3-9のような結果を得た。

余暇の過し方の「勉強・趣味」因子は、学習に対する態度の「勉強好き」および「上級校へのあこがれ」因子とプラスに關係し、「学習アレルギー」「実利的」因子とマイナスに關係している。そして「娯楽・交際」因子は、学習に対する態度のどれともあまり關係がなく、「無為・消極」因子は「勉強好き」因子とマイナスの關係にあることがうかがえる。

単純なクロス集計の結果を、部分的に紹介してきただけであるため、明確な傾向や結論を述べることはできなかったが、前にも述べたとおり、「無為・消極」因子得点の高い余暇の過し方をしてる青少年については、いくらか問題性を感じさせる。余暇の活用、団体活動への参加呼びかけなど、の面から働きかける必要があるのではなからうか。

表3-9 学習に対する態度と余暇の過し方との関係
(数値はピアソンの r を示す)

学習に対する態度 余暇の過しかた	⑱ 肯定的	⑲ 勉強好き	⑳ 学習アレルギー	㉑ 実利主義	㉒ 上級校へのあこがれ
⑮ 娯楽・交際型	-.03	-.05	-.08	-.05	.08
⑰ 勉強・趣味型	.11	.33	-.14	-.16	.20
⑯ 無為・消極型	.07	-.17	.08	.03	.09

三・四 参加度に結びつく要因

二・二で述べたように、重回帰分析によって、学級への参加度の四変数のそれぞれに対して、参加度に關係すると思われる要因のどれが強く結びついているかが検討された。ただし、三・二の後半で述べた二六変数のうち、⑨相談相手と㉒学級への参加理由の二つはデータの性質の問題で、この分析からはずされた。表3-10以下の四つの表は、学級への参加度の各側面について、相対的にいってそれと強く結びついている要因が上げられている。各要因の右の数値は標準偏回帰係数(いわゆるベータ係数)で、他の予測変数の効果を一定に保ったときに、標準得点であらわされた当該の予測変数の一単位分の増減に伴って、基準変数(参加度)がどれだけ増減するかを示している。この表は、全体の二四の予測変数についてのベータ係数のベクトルの中から、目立ったものだけを示してある。なお、それぞれの表には重相関係数(R)とその有意水準(p)とが示されている。

I 承り学習に対する否定的意見に結びつく要因

表3-10に上げられた要因の内容をまとめると二つになる。

表3-10 承り学習に対する否定的意見と結びつく要因

	ベータ係数
㉑ 学習に対する実利主義的態度が強い	.23
㉒ 学級への出席を阻害する条件がある	.19
㉔ 神経症的傾向が高い	.13
⑯ 余暇は無為な、消極的な過ごし方をする	.12
㉒ 学習アレルギーが強い	.11
⑲ 読書・勉強好きである	-.16
⑱ 学習に対して肯定的態度をとる	-.15

$$R = .48 \quad (p < .001)$$

表3-11 学級運営に参加を求める建設的意見と結びつく要因

	ベータ係数
⑬ 読書・勉強好きである	.17
⑤ 勤め人でない	.16
⑱ 学習に対して肯定的な態度をとる	.14
⑰ 勉強・趣味などで積極的に余暇をすごす	.11
⑮ 娯楽・交際中心の余暇のすごし方をする	.08
⑬ 余暇をもっとほしいとは思わない	-.13
⑭ 自分の余暇のすごし方はよいと思っている	-.12

$$R = .38 \quad (p < .001)$$

表3-11に、このあらまし
が示されている。学習に対し
て積極的な姿勢をとっている
学級生は、受身的な学習では
満足できず、自分たちの意思
を反映した学級運営を求める
ことになる。また、余暇を漫
然と過すのではなく、勉強や趣
味で、あるいは外へ出て積極
的に過すことも建設的意見に
結びつく。それに対して、「ま
あ、これでいい。」とか、「こ
んなものだ。」というよう
に、自己や自分をとりまく
状況に特に問題を認めない場
合、学級に対しても受身的に
反応するのではない。

II 学級運営に参加を求 める建設的意見に結びつく 要因

一つは学習に対する態度で、⑬⑱がマイナスの極に、②⑨がプラスの極にある。これは、家庭と学校での経験を土台にして、社会に出
てからの経験が加味されて形成されてきたものであろう。二つめの
要因は②⑨や⑩で表わされるような、情緒不安定で消極的な性格だと
いえる。つまり、個人の態度と性格の要因が、いわゆる承り型の学
習に対する反応と結びついているといえる。

III 学級への出席状況に結びつく要因

表3-12に示されているように、出席を阻害する条件が出席率に
影響することは間違いないが、なかには、今までの出席率の低さを
合理化するために、「出席を阻害する条件がある。」という場合も
含まれていよう。IVの学級への出席
予定の場合と同様、平日の余暇を娯
楽や交際などを中心に過ごしている
人の場合、出席率が下る傾向がある
といえる。しかし、IIで述べたよう
に、このような人は学級運営への参
加を求めるという積極性をもってい
る。④や⑨の要因がプラスに作用し
ているように見えるが、これは今回
の標本の地域の特性の要因のいくつ
かや各地域での標本選択の片寄り、
また、各学級での学習プログラムや
学級運営の在り方など、多くの要因
がからんでいる可能性が強く、この
結果をすぐに一般化することは危険
である。この点については、三・五
でとり上げる。学級への出席状況
は、今回とり上げなかった他の多く
の現実的要因の規定をうけていると
予想される。

表3-12 学級への出席状況と結びつく要因

	ベータ係数
④ 家族と同居していない	.13
⑨ 積極的に参加している団体がある	.13
②⑨ 学級への出席を阻害する条件がある	-.29
⑮ 娯楽・交際中心の余暇のすごし方をする	-.14
⑦ 同年輩のものとのつき合いが多くない	-.10

$$R = .48 \quad (p < .001)$$

IV 学級への出席予定に結びつく要因
表3-13からうかがえるように、今の形のままの学級やセミナー
であると、高学歴の人、年令の比較的高い人、それに女子をつなぎ

表3-13 学級への出席予定と結びつく要因

	ベータ係数
⑬ 読書・勉強好きである	.18
⑨ 積極的に参加している団体がある	.13
⑤ 勤め人でない	.08
③ 学歴(高い)	-.14
② 年齢(高い)	-.12
②④ 神経症的傾向が高い	-.11
②⑥ 学級への出席を阻害する条件がある	-.11
① 性別(女)	-.11
⑬ 娯楽・交際中心の余暇の過ごし方をする	-.09

$$R = .41 \quad (p < .001)$$

件がある本人が言っていることである。これらのもつ意味は、四で触れることにする。

また、重回帰分析で、学級への参加度の四変数のどれとも殆んど結びつかなかった要因は、新聞を読む時間の長さ、積極的に参加しているグループ・サークルの有無、小遣の額、および、学級生の向性(外向・内向)であった。もちろんこれは、今回とり上げた参加度の四変数に限って、しかも今回の標本に限っての話であることは

とめる力が弱いのではないだろうか。この3つの要因は、Ⅲのこれまでの出席状況とは結びついていなかった。なお、⑨や⑤の要因がプラスに作用しているのは、Ⅲで述べた諸要因のからみ合いの可能性がある。

以上をまとめて考えると、学級生の学級への参加度とプラスに結びついていて最大の要因は、本人が読書好き勉強好きであることである。逆に、学級への参加度とマイナスに強く結びついていては、出席を阻害する条

表3-14 参加度を表わす4項目の地域別比較
(記載法は本文参照)

地 域		珠 洲	鳥 屋	鹿 西	羽 咋	加 賀	金 沢	全
項 目								
出席状況	殆んど休まぬ	17	14	17	26	36	37	28
	割合出席	44	34	37	26	31	33	34
	欠半々	19	17	20	21	22	21	21
	それ以下	19	34	27	26	11	9	17
出席予定	全部に出席	69	49	61	47	51	72	61
	プログラムにより	28	34	34	32	35	17	26
	それ以下	3	17	5	21	15	10	13
承り学習の否定		2.9	3.5	3.0	3.2	2.8	3.0	3.0
運営参加を求めて		3.0	3.0	3.2	2.9	3.3	3.1	3.0

いうまでもない。たとえば、学級生と非学級生という比較をすれば、あるいはまた、それぞれの学級の在り方が大巾に変われば、これらの要因が寄与を示すことになるかも知れないのである。

三・五 地 域 比 較

前節では、個人水準での分析を進めてきたが、こゝでは地域の比較を行なうため九地域から六個所(いずれも三五名以上の回答が得られた地域)を選び、これらの地域別集計の結果を分析する。

参加度の地域比較

参加度を表わす四個の項目について地域別に集計した結果を表3

14にまとめた。

この表で、出席状況と出席予定は回答(選択肢)の出現率(%)を、残りの二尺度は地域の平均尺度得点を示した。ある地域の回答出現率が全体(三九〇名)のそれより一〇%以上高い時は、ゴシックで、また一〇%以上低い時は、イタリアックで表した。この表わし方は検定論からいえば適切ではない

表3—16 参加度に関連する諸項目の地域別比較
(記載法は本文参照)

地 域		珠	鳥	鹿	羽	加	金	全
項 目		洲	屋	西	昨	賀	沢	
性 別 (男)		61	60	51	70	67	67	62
年 令	(～19才)	17	29	15	26	11	32	23
	(22才～)	44	43	39	51	47	34	41
学 歴 (中卒)		31	29	17	15	13	23	21
職 業 (勤め人)		58	63	54	81	84	87	77
暮 し 方 (家族と同居)		97	100	95	98	95	61	84
相 談 相 手 (友人)		72	54	68	66	75	63	65
同年輩のつきあい (多い)		50	51	51	58	56	60	55
参加団体 (あり)		89	86	76	79	93	81	83
参加サークル (あり)		53	57	71	66	76	72	67
新聞閲読 (10分迄)		69	74	51	49	55	56	57
小 遣 (1.5万円以上)		31	17	22	36	49	51	41
余 暇 時 間 (少い)		36	23	27	32	33	34	31
余 暇 希 望 (欲しい)		39	46	39	45	56	45	45
余暇の使い方 (よい)		8	6	12	15	18	17	14
学加 (実利的)		28	46	34	45	36	45	43
級理 (知己を求めて)		58	37	51	40	53	50	47
参由								
出席阻害条件 (あり)		42	60	44	58	35	48	47
余暇の型	娯楽・交際	2.9	2.7	2.6	2.9	3.1	3.1	3.0
	無為・消極	3.3	3.7	2.9	3.1	3.0	2.8	3.0
	勉強・趣味	2.7	2.5	2.7	3.1	3.0	3.2	3.0
学 習 態 度	肯 定 的	2.9	3.2	2.8	2.9	3.4	3.0	3.0
	勉 強 好 き	2.8	2.3	3.4	3.1	3.0	3.0	3.0
	学 習 ア レ ル ギ ー	2.9	3.3	3.2	3.1	2.9	2.9	3.0
	実 利 的	3.1	3.5	3.1	2.8	2.8	3.1	3.0
	上級学校あこがれ	3.2	3.1	2.5	3.3	3.0	3.0	3.0

が、地域特徴を大まかに捉えるには差支えないであろう。出席状況では、出席率の最高は金沢市であって、次いで、加賀市、珠洲市、羽咋市、鹿西町の順となり鳥屋町が最も低い。この順序は、六地域

表3—15
6地域 の総人口

地 域	人 口 (昭和44年)
珠洲市	30,324
鳥屋町	6,513
鹿西町	6,377
羽咋市	27,762
加賀市	55,047
金沢市	345,515

の総人口の順位(表3—15参照)と極めてよく一致している。出席予定は、高い方から、珠洲、金沢、鹿西、加賀、鳥屋、羽咋(以下地名には市町を略す)の順である。「承り学習を否定する」意見は鳥屋に強く、「学級の運営参加を求める」意見は加賀に稍強く表われている。四項目を通じて目立つのは、出席の状況も予定も金沢が高く、鳥屋が低いことと後者の地域が「承り学習」に否定的な傾向

を示すことである。

参加度に関連する要因の地域比較

参加度に関連する項目を地域別にまとめたのが表3-16である。この表の記載法も前の表3-14と同様であって、項目内容を簡潔に表わすとみなせる選択肢をなるべく一個だけ選び、その出現率(%)を示した。尺度の場合は平均得点が示されている。この表から読みとれるように、同年代者とのつきあい、余暇時間、余暇利用の自己評価を除けば、六地域の回答出現率にはかなりのバラツキが認められる。次に顕著な差異を示す項目を列挙する。鹿西は女子の比率が高く、勤め人は金沢に多く、鹿西、珠洲、鳥屋で少ない。金沢は他のすべての地域に比べ家族と同居している者が少ない(表3-12)。積極的に参加し活動している団体やサークルをもつ人は加賀に多く、珠洲、鳥屋ではサークルに所属する人が少ない。新聞閲読時間は、珠洲、鳥屋で短い人が多く、毎月の小遣の額では金沢が多く、鹿西、鳥屋、珠洲が少ない。現状より「もっと余暇が欲しい」という回答は加賀に多い。余暇利用の型をみると、鳥屋と金沢が対照的であり、前者は無為・消極的傾向が優勢なのにに対し、後者では娯楽・交際中心、勉強・趣味中心の積極型への傾きを示している。学習態度には、これ程明瞭ではないが、学習アレルギー、実利主義的傾向の目立つ鳥屋と、肯定的態度が強く、学習アレルギー、実利的傾向の弱い加賀が対照的なパターンを示している。

地域特徴のパターン

各項目の断片的な地域比較にとどまらず、回答相互間のパターンに着目して地域特徴を浮き彫りにしたり、地域を類型化することは、地域比較の結果を整理する上で有力な方法である。それには、地域毎の重回帰分析とか、地域自体を変数に含めて分析したり、地域を単位とした因子分析等が考えられよう。しかし、本調査では標本の数や大きさの関係上この種の分析は一切行なわなかった。これ

を補う意味で稍恣意的ではあるが次のような一種のパターン比較を試みた。

表3-17 地域群別にみた回答パターン(記載法は本文参照)

項 目		群 地 域		A		B			C	
				金 沢	加 賀	珠 洲	羽 咋	鳥 屋	鹿 西	
参加度	出 席 状 況	●	●					○	○	
	出 席 予 定	●		●	○			○		
参加度に 関連する要因	男 子 多 し	●	●			●		○	○	
	19 才 以 下 多 し	●	○			●		●	○	
	勤 め 人 多 し	●	●	○					○	
	同 居 少 し	●				○		○		
	参 加 サ ー ク ル 有	●	●	○				○	●	
	小 遣 1.5 万 以 上	●	●					○	○	
	余 暇 評 価 良	●	●	○	●			○		
	余暇の型 { 娛 楽 無 勉 為 不 強 の 型 }	●	●					○	○	
		●		○				○	●	
		●			●			○	○	
学 習 ア レ ル ギ ー な し	●	●	●				○	○		
● の 計		13	8	2	4			1	2	
○ の 計		0	1	4	2			11	8	

表3-14や表3-16の視察から、ある項目群で対照的な回答パターンを示す地域間にはある種の社会的な関係があるのではないかと考えられた。大胆な憶測が許されるなら、回答パターンに差異を齎らす地域要因として、「都市化」を挙げることができるかも知れない。表3-17は地域の人口に基いて、(A)金沢、(B)加賀・珠洲・羽咋、(C)鳥屋・鹿西に三分し、各地域の回答が金沢に類似している程

度を表わそうとしたものである。この表の項目は、回答出現率や平均尺度得点の地域比較で、金沢が全体の値から最も大きくずれる項目、またはずれの程度は第二位であるが地域差の著しい項目に限った。金沢のズレの方向をすべて、●印で表わした。他の地域がこれと同方向・反対方向にずれている場合、ズレの大きい方からそれぞれ二個づつを●、○として表わした。この表から、加賀が金沢に最も類似しており、鹿西・鳥屋が金沢とは対極的なパターンを示すことがわかる。珠洲は、人口の大きさではB群に入るが、回答パターンはむしろC群に似ている。人口は、都市化を表わす一指標に過ぎないから、複数個の指標を利用したり、あるいは多次元的に都市化を捉える等を試みた上で、都市化のあり方と回答パターンとの対応関係を吟味する必要がある。

地域比較の意義について

この種の調査で、地域の特徴などという場合その「地域」概念の内容は必ずしも明確ではないように思われる。地域毎の結果が即ちその地域の特徴であると単純に云い切れるかどうかは頗る疑問である。というのは、地域の特徴であると思われるものが、個人水準の特徴に還元できる場合や、学級のプログラム内容や運営法の反映に過ぎない場合があるかも知れないからである。

前者の例として、仮りに学習態度に性差があり、地域により性比が異なる時は、学習態度に地域差が期待されよう。この種の差異が地域特徴かどうかは疑問である。しかし、その地域の性比が信頼しうるなら、そのような性比を斉らす特徴を地域が備えているといえるかも知れない。

後者は、特に参加度を理解する際に考慮しなければならない点である。参加度を左右する要因として、学級生の個人的条件と、学級のあり方(プログラム内容や運営法)という外的条件の両者が考え

られる。若し、「学級のあり方」を変更したなら消滅してしまうような差異は地域特徴といえない。この調査では、学級のあり方に関する情報を十分に得られなかったので、残念乍らこの点の吟味はできなかった。しかし、この場合にも、「学級のあり方」というものを地域特徴とは無関係に自由に操作できるものとは考えられない。

地域比較において考慮しなければならないもう一つの点は、調査対象の代表性に関する問題である。例えば、青少年人口に対する青年学級生の比率は地域によって異なるであろうし、調査対象者は学級生の無作為標本でないばかりか、完全票の回収率にもかなりの地域差が示されている。若し、人口に比し学級生が少ない地域の学級では、それだけ積極的に参加する学級生が集まっている可能性が大きいという事情があったり、学級開催時に実施された質問調査に対してより積極的に協力する傾向がありそれが回収率にも反映していると仮定できるなら、地域別集計結果から導き出された特徴が直ちにその地域の特徴であるとはいえないであろう。

しかしながら、だからといって地域比較が全く無意味であると主張するつもりはない。

この種の調査で地域比較を行なうことは、まず地域の独自性を明らかにし、更に結果を何らかの形で施策の上に反映させるのに有用であろう。地域比較のもう一つの意義は、個人水準で試みられた分析結果の意味づけを補足することである。例えば、前節(一四二頁)で、学級への出席状況と結びつく要因として、「家族と同居していない」ことがプラスに関連していた。この関連の意味を理解することはそれほど容易ではない。例えば「出席を阻害する条件がある」との回答が出席状況にマイナスに関連することの解釈よりは困難であろう。地域比較の結果、家族との同居率の低い金沢は、出席状況が他に比し良好である事実が知られた。このことは両者の関連づけの

理解を一步深めるとまでいかにせよ、その解釈にある種の手掛りもしくは解釈の仮説を生み出すのに役立つであろう。しかし、時にはかえって誤った手掛りを与えることも無いとはいえない。

最後に次のことを指摘したい。地域比較の究極的な狙いは、個人資料を地域毎に集計したり、単に調査対象地域の特徴を叙述する段階にとどまるものではなく、ある理論的枠組の中で地域を位置づけこの観点から一般化できる形の推論を行なうことであろう。この調査は、探索的段階のサーベイであるから、当初から、地域に関する明確な理論的枠組みをもって出発したわけではなく、前記のように極めて漠然とした形ではあるが「都市化」概念を利用することができのではないかということを示唆するにとどめたい。

四 結 語

今回の分析結果から示唆される点を、三つにわたって述べる。

一、学級生の学級への参加度とプラスに結びついている大きな要因は、本人が読書好き、勉強好きであるということであった。このような個人差の相当の部分は、幼年期からの家庭での養育と教育、および、学校教育を通して生じてきたものと考えられる。このことは、社会教育を生涯教育の観点から捉え直すことの必要性を示している。子どもが疑問をもち、それを解決するために主体的に学習するように動機づけられ、そして、そのようなときの学習のし方を身につけていることが、生涯教育の成り立つ重要な条件であろう。ところが、現実の家庭教育、学校教育、そして社会教育は、この目標に照した場合、どれほどの成果を上げてきたといえるだろうか。今の日本の教育の現状は、子どもの主体的学習への動機づけをあまり行なわず、学習のし方を身につけるよりは正答をすばやく出せるよ

うな、いわばクイズ向けの子どもを、より多くつくり出しているのではないだろうか。この状況の改変のためには、家庭教育の在り方が、個々の親の自覚を基礎として変わって行く必要がある、更に、もっと大きい問題としては、幼児の保育・教育をも含めた広い意味での学校教育の変革が前提になる。デイヴ（一九七三）たちの考えは、この問題に学校のカリキュラムの方向から近付こうとしたものである。学校時代に勉強嫌いであった人が、のちになって、なにかに触発されて学習に打ちこんで成果を上げたという話を聞くことは確かである。しかし、通常の状況では、それは稀なケースである。学習に対する基本的な構えを青年期の後半になってから変容するためには、新しい観点に立った指導法が必要である。

学級への参加度と本人の勉強好きの程度とが結びついていることを別の観点から見ると、調査対象となった青年学級や開発青年セミナリーの在り方が、従来の学校教育と類似したものになっており、そのような形態での教育に関心を示し、そこで成果を上げられるような青年にとって有利になっているといえる。ちがったタイプの青年の学習を助けるためには、ちがった指導法を適用するというATI（適性・処置の交互作用）の考え方が、この領域でも活かされる必要がある。

二、学級への参加度に、出席を阻害する条件があると本人が言っていることがマイナスに結びついていた。阻害条件のなかには、個人と対置された環境条件の中に客観的に外在しているものもある。しかし、多くの阻害条件は本人の主体的条件とからみ合っている。いわば、心の中に、環境条件とからみ合う複雑な阻害条件がある。このような場合には、本人の訴えている環境側の阻害条件を解消しても、問題の解決にならないことが多い。従って、適切な働きかけをするためには、学級生が訴えている直接の阻害条件だけに眼を奪

われるのではなく、機能的にかれの参加を阻んでいる力を見通す必要がある。

三、学級生に対する指導が効果を上げるためには、学級生をマスとして見るのではなく、一人一人に眼を向けることが大切である。学級への参加度に、学級生の情緒安定性や、生活のパターンといった個人の諸要因が結びついていることは、従来、あまり注目されなかった点だと思う。社教主事と学級の仲間による配慮の眼が、一人一人の学級生に届いていることが重要である。精神面あるいは社会面、生活面で悩みを抱えている青年が、積極的な学習活動に参加することは困難で、これも上述の阻害条件の一つであらう。このように、学級の仲間のもつ心理治療の効果により、青年たちの適応に寄与できるような学級という視点は重要な意味をもつと思う。

今回の結果から示唆されることは、いわば当り前のことばかりであるが、これが現場での実践を見直す一つの眼を提供し得るとすれば幸いである。この次のステップの研究は、今回の相関的方法の研究結果を踏まえた、実験的方法による研究であらう。

付記 この研究は、筆者たちが石川県青少年教育調査委員（昭和四六～四七年度）を委嘱されたことを契機に行なわれたもので、結果の一部は、石川県教育委員会「青少年教育振興のために」（一九七二、一九七三）に発表されている。調査の企画と実施にあたり、石川県および県下の市町村の担当者の方々からいただいた助言と協力に感謝したい。なお、計算は、民間の計算機のはかに、金沢大学電子計算機 FACOM 230-35 を用いて行なった。

引用文献

Dave, R. H. Lifelong education and school curriculum. *UIE*

Monographs 1. Hamburg: Unesco Institute for Education, 1973.

Eysenck, H. J. A short questionnaire for the measurement of two dimensions of personality. *Journal of Applied Psychology*, 1958, 42, 14-17.

付表 1 単純集計及び性別、年齢別に集計した質問の回答率(%)

〔性、年齢、計の欄の数値は%を示し計の実数は単純集計の人数を示す。計は全体の回答率である。年齢の低、中、高はそれぞれ、19才以下、20才以上21才まで、22才以上を表わす。〕

質 問	回 答	性		年 令			計	計の実数
		男	女	低	中	高		
問2 学 歴	中学卒業 高校在学・卒業 大学・短大在・卒	23 74 3	18 73 9	25 75 0	23 70 6	17 76 7	21 74 5	82 288 20
問3 暮 し 方	家族と一緒に 上記以外	84 16	86 14	70 30	85 15	92 8	84 16	329 61
問4 職 業	勤 め 人 上記以外	74 26	26 19	87 13	75 25	73 27	77 23	300 90
問12 悩みを相 談する相 手	相談しない 家族に相談 友人に相談 上役・先輩に相談 そ の 他	10 18 60 9 3	7 14 72 5 1	7 18 65 8 2	9 14 66 8 3	10 17 63 8 1	9 16 65 8 2	35 64 252 31 8
問13 同年輩との つきあい	機会が多い 機会は少ない・ない	62 38	43 57	49 51	46 54	65 35	55 45	213 177
問14 新 聞	毎日10分以下読む 毎日それ以上読む	45 55	78 22	75 25	67 33	39 61	57 43	224 166
問16 団体活動	参加団体あり 参加団体なし	88 12	76 24	83 17	78 22	87 13	83 17	324 66
問17 サークル	参加している 参加していない	73 27	57 43	60 40	65 35	72 27	67 33	262 128
問19 毎月の小 遣	1万円未満 1万5千円未満 1万5千円以上	21 32 47	44 27 29	38 22 41	32 32 36	22 34 44	29 30 41	114 118 158
問20 余暇の現 状	全くない・少ない 平均なみ 多 少 そ の 他	31 52 16 1	32 61 7 0	30 61 9 0	31 55 13 1	32 52 14 1	31 55 13 1	122 216 49 3
問20 余暇の希 望	もっと欲しい 現状・もっと少なく そ の 他	42 56 2	50 50 0	53 47 0	44 55 1	42 57 1	45 54 1	176 210 4
問21 余暇利用 の評価	悪い方だと思う ふつうだと思う よい方だと思う	42 42 16	37 52 11	41 51 8	43 42 15	38 46 16	40 46 14	157 178 55
問27 学級参加 理由	実 利 的 知己を求めて 何となく・その他	47 42 12	36 56 7	40 45 15	44 46 10	42 50 7	43 47 10	166 185 39

付表 1 (つづき)

質 問	回 答	性		年 令			計	計 の実数
		男	女	低	中	高		
問28 学級への 出席状況	ほとんど休まぬ 割合出席した方 出席半々ぐらい それ以下	30	23	24	22	35	28	108
		33	35	40	37	29	34	133
		21	20	22	23	19	21	81
		15	21	15	19	17	17	68
問29 出席障害	出席障害条件なし 出席障害条件あり	57	45	43	54	57	53	205
		43	55	57	46	43	47	185
問32 今後の出 席予定	全部に出席したい プログラムにより それ以下	64	57	67	59	60	61	239
		25	29	25	30	24	26	102
		12	14	8	11	16	13	49

付表 2 質問に対する回答から構成した諸尺度の因子得点分布の全体(計)、性別、年令別比較

〔表の数値、年令区分等すべて付表1と同様。尺度の構成、意味は本論参照〕

質 問 項 目	尺 度	因 子 得 点	性		年 令			計	計 の実数
			男	女	低	中	高		
問23 平日における余暇の過ごし方	娯 楽・交 際 中 心	1	5	14	16	11	3	9	34
		2	23	29	30	26	22	25	99
		3	35	35	27	35	39	35	136
		4	30	18	25	21	29	25	99
		5	7	4	2	8	6	6	22
	無 為・消 極 的	1	6	2	2	4	7	5	18
		2	31	26	34	27	27	29	113
		3	28	33	25	32	32	30	118
		4	27	34	30	34	26	29	115
		5	8	5	9	4	8	7	26
	勉 強・趣 味 中 心	1	7	4	6	5	7	6	23
		2	32	22	33	30	25	28	111
		3	30	39	27	38	32	33	129
		4	26	25	26	21	29	25	99
		5	6	10	8	6	7	7	28
問24 学 習 に 対 する 態 度	肯 定 的 態 度	1	10	4	11	4	9	8	30
		2	20	16	25	20	13	18	71
		3	37	38	39	37	38	38	147
		4	32	39	24	37	39	35	135
		5	1	3	1	2	2	2	7
	読 書・勉 強 好 き	1	10	3	3	6	11	7	28
		2	28	20	31	23	24	25	99
		3	35	33	39	32	33	34	133
		4	22	34	23	32	24	26	103
		5	5	10	5	7	8	7	27
	学 習 ア レ ル ギ ー	1	8	5	3	8	9	7	28
		2	26	19	18	23	26	23	91
		3	36	44	44	39	36	39	152
		4	26	24	26	23	26	25	97
		5	5	7	8	8	2	6	22

付表 2 (つづき)

質 問 項 目	尺 度	因 子 得 点	性		年 令			計 の 実 数
			男	女	低	中	高	
	実 利 的 態 度	1	8	3	5	4	10	6 25
		2	27	27	18	30	30	27 106
		3	31	33	28	31	34	32 123
		4	27	30	33	31	23	28 110
		5	7	7	16	5	3	7 26
	上級学校へのあこが れ	1	8	9	8	8	9	8 32
		2	23	25	24	23	24	24 93
		3	29	35	26	34	31	31 121
		4	33	29	39	31	27	31 122
		5	8	2	3	4	8	6 22
問30 学級のあり方につ	承り学習の否定	1	1	1	0	1	1	1 4
		2	37	41	43	39	36	39 151
		3	31	31	27	34	31	31 121
		4	19	19	14	19	22	19 74
		5	12	7	16	7	10	10 40
	運営参加を求めて	1	10	10	15	8	9	10 38
		2	20	11	17	15	17	16 64
		3	32	38	35	35	33	34 134
		4	38	41	33	42	41	39 154
		5	0	0	0	0	0	0 0

付録 調査用紙

お 願 い

わたくしたちは、「青年学級」や「開発青年セミナー」などの青少年教育活動をいっそう楽しく、有意義にすすめていくために調査を行なうことになりました。

この調査は、教育活動の改善と充実をはかるための貴重な資料になりますので、面商でも協力ください。

なお、調査結果はすべて統計的に取り扱いますから、ひとりひとりの名前や意見が、他にもれるようなことは絶対にありません。どうぞ、心配なく、日頃感じておられることを、ありのままに答えてくださるようお願いいたします。

石川県青少年教育調査委員会

記入のしかた

- それぞれの質問について、あてはまる番号を○で囲んだり□の中に入れてきたりなどはや文を記入するようにしてください。
- 答えにくい間もあると思いますが、答えなければならぬ間には必ず答えてください。
- 全部書き終ったら、封筒に入れて封をし、係の方に提出してください。名前は、どこにも書く必要はありません。

問 1 まず、あなたの、性別と年齢をおしえてください

性別	1 男	2 女	年齢	歳
----	-----	-----	----	---

問 2 あなたの学歴は、次のどれにあたりますか (一つだけに○)

- 1 中学校卒業 (高校中退を含む)
- 2 高等学校在学中
- 3 高等学校卒業 (高専、大学中退を含む)
- 4 大学在学中
- 5 大学卒業 (高専、短大を含む)

問 3 あなたの現在の暮らし方は次のどれにあたりますか (一つだけに○)

- 1 家族といっしょに住んでいる
- 2 家族とはなれて、寮、寄宿舎 (住み込みを含む) にいる
- 3 家族とはなれて、下宿、間借り (アパートを含む) にいる
- 4 その他 → 具体的に書いてください

問 4 あなたは現在、主としてどんな形で職業 (しごと) についていますか (一つだけに○)

- 1 職業についていない
- 2 家業をやっている
- 3 勤めている
- 4 その他 → 具体的に書いてください

問 5 (2「家業をやっている」と答えた人だけ答えてください) あなたの主なしごとは、次のどれにあたりますか (一つだけに○)

- 1 農林漁業
- 2 商業、サービス業
- 3 製造、加工業
- 4 その他 → 具体的に

問 6 (ここから問 11までは、問 4で 3「勤めている」と答えた人だけ答えてください) あなたのしごとは、次のどれにあたりますか (一つだけに○)

- 1 商店、会社、官公庁で事務的なしごとをしている
- 2 会社、商店などの管理・経営にあたっている
- 3 商業やサービス業で、店員や販売、セールスなどをしている
- 4 工場や土木業の現場ではたらいている
- 5 職人としてはたらいている
- 6 運転手、交換手、理・美容師など、技術者としてはたらいている
- 7 教員、看護士、栄養士、工場の技術者などをしている
- 8 その他 → 具体的に、くわしくしごとの内容をかいてください

問 7 あなたの勤め先での、まい日の勤務時間はどのようになっていますか (一つだけに○)

- 1 きまっていない
- 2 午 前 □ 時から、午 後 □ 時まで □ 時間 □ 分
- 3 その他 → 具体的に

問 8 (勤めている人だけ) 時間外勤務 (労働) は 1 か月平均何時間ほどですか (一つだけに○)

- 1 な し
- 2 10 時間以内
- 3 10 時間から 20 時間ぐらいまで
- 4 20 時間より多い
- 5 決っていない (不定)
- 6 その他 → 具体的に

問 9 (勤めている人だけ) 休日とはどれくらいありますか (一つだけに○)

- 1 な し
- 2 月 1 日
- 3 月 2 日
- 4 月 3 日
- 5 月 1 日 (月 4 日)
- 6 月 2 日
- 7 その他 → 具体的に

問 10 (勤めている人だけ) あなたの勤め先にはサークルやクラブ活動がありますか。また、あなた自身は、サークルやクラブ活動に参加していますか (一つだけに○)

- 1 な い
- 2 あるけれど参加していない
- 3 ある、参加している

問11 (動めている人だけ) あなたの動め先には、あなた自身の悩みや困ったことなど、なんでも打ち明けたり、相談したりできる上役や先輩がいますか (どちらかに○)

- 1 い える
2 い ない

問12 あなたが、自分の悩みや、困ったことなど、なんでも打ち明けたり相談したりするのは (または、することができるとは) どなたですか (一つだけに○)

- 1 だれにも、相談しない (相談できない)
2 家族 (または、家族のうちのだれか) に相談する
3 親しい友人に相談する
4 職場の上役や先輩に相談する
5 その他 → 具体的に

問13 あなたは現在、同じ年代 (年ごろ) の人たちと、つきあう機会が多い方ですか (一つだけに○)

- 1 つきあう機会が多い
2 多いとも少ないともいえない
3 つきあう機会が少ない、(または、ない)

問14 あなたは、まい日どれくらい新聞を読みますか (一つだけに○)

- 1 全然よまない
2 10分ぐらいまで、ちょっと目を通す
3 30分ぐらいまでは読む
4 30分以上読んでいます

問15 もし、現在の新聞のページ数が増えたとしたら、あなたは、どんな記事や欄がふえたらよい (ふやしてほしい) と思いますか (一つだけに○)

- 1 政治、経済、社説、解説などの欄
2 文化、教育に関する欄
3 家庭、婦人欄
4 告知欄 (おしらせの欄)
5 テレビ、ラジオなどの番組予告欄
6 スポーツ、マンガ、小説、娯楽などの欄
7 投資欄
8 その他 → 具体的に

問16 現在あなたが積極的に参加し、活動されている団体がありますか あてはまるもの全部に○をつけてください

- 1 な い
2 地域の青年団
3 労働組合や同業者の団体
4 宗教団体の団体
5 社会福祉や福祉活動をする団体
6 その他 → 具体的に

問17 それでは、次のようなサークルや同好会で、あなたが積極的に参加しておられるのがありますか、あてはまるもの全部に○をつけてください

- 1 な い
2 スポーツ関係のサークルや同好会
3 趣味や娯楽のサークルや同好会
4 読書会、英会話クラブなど勉強を目的としたサークル
5 社交や親睦を目的としたサークル
6 その他 → 具体的に

問18 次のなかに、現在、あなたのやっておられることがありますか

あてはまるもの全部に○をつけてください

- 1 和洋裁、料理、編物などを習っている
2 生け花、お茶、音楽などを習っている
3 家・習道などのスポーツを習っている
4 高校や大学の通信教育をうけている
5 社会通信教育をうけている
6 ラジオ、テレビの教育講座で勉強している
7 簿記、珠算、英会話などを習っている
8 図書館をよく利用して勉強している
9 文化講演会などによくでかけている

問19 あなたのまい月の支出額についてお答えください

- 1 あなたが自由に使える額は、全部でいくらぐらいですか
約 円
2 そのうち、図書購入など勉強にかかう額は、いくらぐらいですか
約 円
3 また、趣味、娯楽、スポーツなどにかかう額は、いくらぐらいですか
約 円

問20 あなたは余暇 (自分が自由に使える時間のこと、わる時間などは含まない) がじゅう分ありますか 次の現状欄、希望欄の中からそれぞれあてはまるものを選んでください

(どちらも、一つだけに○)

- | 現状は | 希望は |
|----------------|--------------|
| 1 余暇がまったくない | 1 もっとほしい |
| 2 他人に比べて余暇が少ない | 2 現状でよい |
| 3 平均なものである | 3 もっと少ない方がよい |
| 4 他人に比べて余暇が多い | 4 その他 → 具体的に |
| 5 その他 → 具体的に | |

問21 あなたの場合、自分の余暇の過ごし方に、自分で点数をつけること次のどの段階にあたると思いますか

- 1 ひじょうに悪い方だと思う
2 少し悪い方だと思う
3 よつうだと思ふ
4 少しよい方だと思う
5 'ひじょうによいと思ふ

問26 あなたが、この学級(セミナー)に参加するようになった直後の、
きっかけは、次のどれかにあてはまりますか
(該当するもの、いくつにでも○)

- 1 家族にすすめられて
- 2 職場の人にすすめられて
- 3 ポスター、パンフレット、広告をみて
- 4 主事や担当の人にすすめられて
- 5 先輩、友人にすすめられて
- 6 すみわたられたわけではないが、みんなが行っているので
- 7 その他 → 具体的に

問27 あなたが、この学級(セミナー)に参加された最大の理由は、次のどれにあたりますか (一つだけに○)

- 1 職業(しごと)に役だてるため
- 2 生活に役立つ知識や技術を身につけるため
- 3 暇な時間を有効にすごすため
- 4 社会常識を身につけるため
- 5 いろいろな人びとと知りあいたいになるため
- 6 何となく参加しなければならぬような雰囲気だったため
- 7 その他 → 具体的に

問28 あなたの、学級(セミナー)への出席状況は、次のどれにあたり
と思いますか (一つだけに○)

- 1 よく出席している方(ほとんど休まない)
- 2 初めは出席している方である(ときどき休むくらいである)
- 3 出席、欠席、半々くらいである
- 4 欠席の方が多い(あまり出席しない方である)
- 5 ほとんど出席したことがない、全然出席していない
- 6 その他 → 具体的に

問29 あなたには、この学級(セミナー)に出席しにくいような事情が
ありますか。次の中からあてはまるものを選んでください
(一つだけに○)

- 1 とくに出席しにくいような事情はない
- 2 家族の理解がない
- 3 夜がおそくなるので都合が悪い
- 4 忙いので出席しにくい
- 5 場所が不便である
- 6 上役や同僚など職場の理解がない
- 7 しごとで疲れ、とても行く気になれない
- 8 学級のプログラムや運営のし方がおもしろくない
- 9 その他 → 具体的に

問30 学級(セミナー)のあり方について、次のようないろいろな意見
があります。それぞれについて「そう思う」「そうは思わない」の
どちらかに必ず○を入れてあなたの意見をあらわしてください

	そう 思う	そうは 思わない
1 始まる時刻、終わる時刻がレ・ズである		
2 一般教養にかたよりすぎる		
3 講師の選に、つまらぬものが多い		
4 プログラムの組み方に上の好みが入りすぎる		
5 レクリエーションをふやす方がよい		
6 出席している者と費用がかさみすぎる		
7 実生活に役立つ内容が少ない		
8 職業上の技術についての時間をもっとふやしてほしい		
9 リーダーがしつじょうによく世話をしてくれる		
10 なるべく、お互いの討論や話し合いの時間をよすようにしたらよい		
11 もっと有名な人の話をききたい		
12 一つの話題を深く掘り下げて行くようなプログラムがほしい		
13 講師の話は、むずかしすぎる		
14 まじめに参加していないものが多い		
15 授業料をとってもよい		
16 学級生が自分たちの手でプログラムを考えようにしたらよい		
17 なんといっても講師の話が ためになっている		
18 学級だけでなく、本やテレビでとりで勉強することができると		

問31 現在までのプログラムの中で、あなたがもっとも関心をもちた
のは、どんな内容のものだったでしょうか、具体的に書いてください

問32 あなたは今後、学級(セミナー)に、どの程度出席しようと思っ
ていますか (一つだけに○)

- 1 できれば全部に出席しようと思っている
- 2 プログラムによって、出席をきめたいと思っている
- 3 あまり出席したいと思っていない
- 4 やめたいと思っている
- 5 その他 → 具体的に

ご協力ありがとうございました。これでおしまいです。
いま一度、記入もれがないか、確認で封筒に入れてください
最後に、この調査や、内容について、お気づきの点やご意見がありまし
たらどんなときかいつでも結構ですから、次に書き入れてくださるよう
お願いします。